

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12973

研究課題名(和文)戦後民主主義と知識人の社会参加に関する思想史的研究

研究課題名(英文)Research on Democracy in Postwar Japan and the Social Engagement of Intellectuals from the Standpoint of the History of Thought

研究代表者

渡辺 恭彦(Watanabe, Yasuhiko)

京都大学・大学図書館・特定助教

研究者番号：90817727

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文): 戦後の作家である高橋和巳を戦後知識人として捉え直し、埴谷雄高・竹内好・吉本隆明らと比較しつつ、その戦後民主主義論や知識人論を明らかにした。それにより、戦後日本は敗戦体験を思想化できておらず、超越的価値が不在の状態であると高橋は見なしていることが明瞭になった。高橋が京大全共闘を支持したのも、戦後日本のあり方に不満を持っていることが背景にあった。

さらに、高橋の思想形成を踏まえたうえで、1969年の京大闘争を分析した。教養部教官が闘争学生を支持し教官共闘結成へと至った経緯などに焦点を当てて、新資料なども公開しながら企画展「1969年再考」(京都大学大学図書館主催)を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高橋和巳の小説や評論は、全共闘世代に広く読まれたが、近年では顧みられることが少なくなっていた。本研究では、高橋の思想形成と時代状況とを照らし合わせ、埴谷雄高や竹内好から受けた影響や全共闘を支持するに至った経緯について、思想形成史的に明らかにした。戦後知識人の一人として高橋を位置付けることができる程度できたと考えている。

京都大学大学図書館企画展「1969年再考」では、大学知識人・学生・大学といった複数の当事者の視点を導入して展示内容を構成した。1969年の歴史的検証を進めるにあたって、当事者であった人々へのはたらきかけになったのではないかとと思われる。

研究成果の概要(英文): Grasping Takahashi Kazumi, who is a novelist, as a postwar intellectual and comparing his thought with the thought of Haniya Yutaka, Takeuchi Yoshimi and Yoshimoto Ryumei, I have revealed Takahashi's view on democracy in postwar Japan and intellectuals. Having done so, his recognition of the situation became clear. He recognized that the Japanese in postwar Japan were not able to understand the defeat ideologically and that transcendent value is absent from their position. His support for the University of Kyoto's Zenkyoto was based on his discontent with the situation in postwar Japan. Considering the forming of his thought, I analyzed the University of Kyoto's struggle in 1969. Focusing on the process of teachers in the general education course supporting the struggle and setting up the teachers' All-Campus Joint Struggle League, I have curated the exhibition "Reconsideration of Affairs in 1969" (hosted by Kyoto University Archives) displaying recently discovered documents.

研究分野：思想史

キーワード：高橋和巳 戦後知識人 戦後民主主義 全共闘運動

1. 研究開始当初の背景

本研究では、戦後民主主義に対する関心が高まっている背景を踏まえて、戦後民主主義とは何かを問い続けた知識人に焦点を当てた。

2000年以降、日本の戦後思想・戦後史の再検証が盛んに行われ始めた。小熊英二[2002]は、ある種の共同性の希求として「ナショナリズム」という言葉があてられたことを、当時の知識人の言説をもとに論証した。戦後思想の研究は、占領期(1945~1952年)までを対象とするものが多く、高度経済成長期(1954~1973年)のものは少なかったが、高度成長期の新左翼運動を現代的なアイデンティティ・クライシスに陥った若者の自己確認運動、あるいは連帯のユートピアを求めた運動として位置づける研究が発表された(小熊英二[2009])。2010年代に入ると、対象となる知識人や集団を広げ戦後を捉え直すことを試みる研究が発表された(竹内洋[2011]、出原政雄編[2015])。さらに戦後70年を迎えた2015年以降、日本の戦後民主主義を再検討する研究が国内外で高まってきた。とりわけ、安保法案をめぐる問題化された立憲政治のあり方や民主主義思想を原理的に見直す研究が数多く発表されている。こうした流れは、1960年の安保闘争や全共闘運動などの社会運動をあらためて問い直すことにもつながっている。

1960年代に社会運動や学生運動に当事者としてかかわった知識人の回顧録が発表されはじめたほか(上村忠男[2015]、山本義隆[2015])、1968年の学生運動を世界的なコンテクストに置き直して検討する研究が刊行された(西田慎・梅崎透[2015])。

研究開始当初、戦後民主主義という価値を捉え直す、またとない時期に来ていた。

2. 研究の目的

戦後民主主義に対する関心が高まっているなかで、戦後知識人の思想を再検討するのは、次の問いが関わっている。それは、戦後民主主義という価値がいかなるものなのか明確に定義されないまま受容されてきたということである。

したがって、本研究では、二つの問いの解明を目的とした。第一に、戦後民主主義という価値の問い直しが進められているという状況に鑑みて「戦後民主主義という価値を知識人がどのように捉えたのか」を明らかにすることである。この問いは看過されてきたのが実情である。さらに本研究では、戦後民主主義という価値の問い直しが進められているという現状に鑑みて、第二に、「戦後民主主義を問う社会運動や学生運動に知識人がどのようにコミットしたのか」という問いを設定した。

二つの問いをもとに、思想形成に即して各知識人の価値意識を捉え直すことを試みた。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では二つの方法を採用した。

(1) 戦後民主主義の意味を問い直し、知識人が社会参加する画期となった出来事として1960年安保闘争と1968-9年の学生運動に焦点を合わせ、各人の言説を分析する。

第一に、戦後民主主義に対する言説をもとに、対象となる知識人を選定した。1960年安保をめぐるなされた論争に多くの知識人がコミットしていったことは、戦後知識人にとって端緒となる出来事であった。戦後民主主義を「虚妄」と捉え、戦後民主主義の旗手となった丸山眞男、60年安保闘争で新左翼を擁護する立場から戦後民主主義を「擬制」と捉えた吉本隆明、そして京大全共闘支持を表明し、戦後民主主義の欺瞞性を問うた高橋和巳を主たる対象とした。本研究では、自由や平等という漠然とした意味で捉えられてきた戦後民主主義を当時の知識人がどのように捉えたのかを相互に比較した。

その際、代表的な著作や論文だけではなく、時事的論説、座談会等での発言を各々の特質を区別しながら整理し、相互に対照しつつ検討した。

1968年から69年にかけての学生運動については、京都大学大学図書館所蔵の大学紛争関係資料および京大闘争関係資料にもとづき、教官の動向を追跡した。

(2) 対象とする知識人の思想形成過程を太平洋戦争期や占領期の動向に即して明らかにする。

第二に、三者の思想形成を、世代の差や戦争体験に着目しつつ辿り直した。それにより、戦後民主主義に対する解釈の違いがどのように生じたのかを探索した。とりわけ高橋に定位しつつ、座談会等で語った実体験と小説の突き合わせを行い、戦争体験が思想形成に与えた影響を判定した。

4. 研究成果

まずは、谷川雁・吉本隆明・埴谷雄高『民主主義の神話 安保闘争の思想的総括』（1960）を読み解き、吉本が丸山眞男を意識しつつ戦後民主主義を「擬制」と捉えていることを確認した。さらに、安保闘争から1968年前後にかけての動向や言説を検討した結果、小説家であり中国文学者である高橋和巳を主たる考察の対象に据えつつ他の知識人との比較を行うことが、研究課題の遂行に最適であるという認識に至った。

高橋の来歴をたどりつつ、主要作品『捨子物語』（1958）『悲の器』（1962）『憂鬱なる党派』（1965）などから、高橋が敗戦体験の思想化を課題としていたことを浮き彫りにした。社会参加という観点からは、1950年代の学生運動である「反戦学生同盟」や「京大天皇行幸事件」に高橋が関わっていたことが実作や思想形成において重要な意義を持つことを再確認した。

高橋は1950年代初頭に「京大天皇行幸事件」に端を発する抗議活動に参加した後、政治活動から離れていった。60年安保闘争時、最前線に立つことはなかったものの、デモへの参加や10年後に犠牲者への追悼集を編むなど、関心を継続させていたことが伺える。高橋は、同時代的に発言していた竹内好や埴谷雄高らの民主主義論を継承しつつ、「戦後民主主義」への考えを深めていった。その過程で、埴谷から自己権力論を、竹内から価値の選択やあらがいの考え方を受け継いだと見られる。

高橋は大阪大空襲による廃墟のなかで思想形成をはじめ、国家価値から民主主義への急激な価値転換が起こったことを高橋は冷徹に見ており、自由や平等を寿ぐ戦後民主主義についても批判的な態度を取り続けたことが明らかになった。

その後、全共闘支持を表明し自己解体へと至るなかで、高橋は自己の思想や戦後民主主義への見方を先鋭化させていった。

戦後日本は敗戦体験の思想化に失敗したとみなす高橋にとって、「戦後民主主義」とは理念となる価値ではなく、議会制民主主義などへの反抗心をあらわにしている学生は戦後民主主義の矛盾を体現する存在であった。

さらに小田実や三島由紀夫との比較から、戦後日本は敗戦体験を思想化できておらず、超越的価値が不在の状態であると高橋は見なしていることが明瞭になった。高橋が京大全共闘を支持したのも、戦後日本のあり方に不満を持っていることが背景にあった。戦後二十年たって顕在化した精神的空虚は、戦後民主主義の矛盾のあらわれであると高橋はみている。

学生運動論で高橋は、「思惟のねじり合い」という表現を度々用いる。高橋にとって学生運動の持つ意義、そして日本の行き先とは、超越的な視座からではなく、個々の主体が相互主体的に「思惟をねじり合う」ことによって指し示されるべきものだった。

これらの成果を「高橋和巳における超越的価値への志向 戦後民主主義のただなかで」（出原政雄・望月詩史編『「戦後民主主義」の歴史的研究』2021年、法律文化社、所収）で刊行した。

上記の考察を踏まえて、時代の先鋭的な矛盾を体現する知識人の苦悩を小説で描き、知識人としての立場にも自覚的であった高橋の知識人論を分析した。文学理論研究の成果である「知識人の苦悩 漱石の『それから』について -」（1967）で実作『悲の器』（1962）を知識人文学と位置づけるなど、知識人とは何かが高橋にとって大きなテーマであった。

高橋の知識人論は、万人が知識人になるべきであるという埴谷の知識人論からの影響が強いことが明らかになった。このことは、吉本隆明との対談（1968年5月）をもとに、高橋が捉える「庶民」と吉本隆明が唱える「大衆の原像」を比較することにより明瞭になった。

1969年前後に高橋は、ロシア革命のインテリゲンチアとマルクス主義の知識人論を踏まえつつ、学園闘争で叫ばれる自己否定を文学的に捉え直した。文書館所蔵の京大闘争資料から学生が突きつけた問いを取り出し、学生との対話のなかで高橋が知識人論をどのように先鋭化させたのかを考察した。

上記の成果を「高橋和巳の知識人論 「わが解体」まで」『京都大学大学文書館研究紀要第20号』で発表した。

2022年度には、上記の研究を踏まえたうえで、1969年の京大闘争を分析した。高橋は京大全共闘支持を表明し、闘争の激しかった教養部の教官が置かれた立場にも共感を示していた。その後、教養部教官の一部の層は闘争を支持し、全学教官共闘会議の結成へと至るなど、動きを先鋭化させていった。こうした経緯などに焦点を当てて、農学部ゼネスト公判資料や医学部紛争関係資料などの新資料なども公開しながら企画展「1969年再考」（京都大学大学文書館主催）を開催した。

企画展開催に際して資料分析を行った結果、教養部関係資料の検討をさらに進めることにより、教官協議会の設置や内部批判、全学教官共闘会議結成などの一連の経緯を跡付けることが可能であるという知見を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 渡辺恭彦	4. 巻 20
2. 論文標題 高橋和巳の知識人論 - 「わが解体」まで -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都大学大学文書館研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡辺恭彦
2. 発表標題 「高橋和巳における自立の思想－戦後民主主義のただなかで－」
3. 学会等名 第44回 社会思想史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 出原 政雄、望月 詩史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 304
3. 書名 「戦後民主主義」の歴史的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

京都大学大学文書館企画展「1969年再考」を開催した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------